
Cシリーズ

三谷尾だま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cシアリーズ

【Nコード】

N3389BA

【作者名】

三谷尾だま

【あらすじ】

毎回、どこかにキュラソーさんが出てくる、結局、何なのかよく解らないファンタジイシアリーズ。それぞれの話は読み切りで、あらすじと傾向は各冒頭にあります。どの話からでも読めます。すつきりしない話ばかりなので、曖昧な終わり方が嫌だと読みづらいいと思います。現在、以前ブログに載せていた二編しかないので、そのあととりあえず完結表示しておきます。

マーガリート幻想・前編（前書き）

この作品は、PG12程度です、約3、700字。あらすじ：私は、戻ってこない夫を待ち、日に日にやつれていくマギーを心配していた。買い物帰りに、ある男性にぶつかり……。キーワード：殺人事件

マーガリート幻想・前編

私は、庭弄りの手を止め、額の汗を拭った。花壇の雑草を引き抜いたときにかかったであろう土を、白い花びらから払った。たくさんのマーガリートが、花壇には咲いている。

ゆっくりと立ち上がり、抜いた雑草を入れていたバケットを隅に寄せた。花壇は作業を始めるまえよりも明らかに片付き、私は少しの満足感を思える^{おほ}。

休憩をしようと、作業用の手袋を外してスカートの裾を払う。手を洗っていると背後から人の気配がした。振り向けば、彼女が立っていた。

「わたし、もう駄目だわ！ あの人は今日も帰ってこない。きっとわたしのことが嫌になったのよ」泣きながら彼女は言う。

「そんなことはないわ、マギー。彼は、きっと帰ってくるわよ」私は、そう言って彼女を慰めた。

「でも……、もう彼が帰ってこなくなつて一週間も経つものよ？」

「搜索願は出したのでしょうか？ 警察が見付けてくれるわ」

それから、夫が失踪したといって取り乱している彼女の、もう何度目かになる話を聞いて、相槌をつけて励ます。どうにか彼女は落ち着きを取り戻し、しきりに涙を拭いていた。

「そんなに落ち込んでばかりでは駄目だわ。そう、これから一緒に

お茶の時間にしましょう、ね？」

「でも……、そんな気分じゃないわ。気が気じゃなくて」

「だからよ。一緒にケーキでも焼きましょう。そうしたら、きっと気分も紛れるわ。私、材料を買ってくるから、貴女、準備をしていて頂戴な」

上手く彼女を宥めると、彼女も少し乗り気になったようで、無言で頷き、準備をするために彼女の家の方に歩いていった。彼女の家には、性能の良いアブンがあった。

私は溜息を一つ吐き、玄関の棚からハサミを取って、花壇に咲いているマーガリートをメインに、いくつかの花を切った。それを持って台所へ行き、花瓶に活けると見栄えをチェックする。上出来だった。

冷蔵庫の中と棚を見て、在庫を確認して財布の入った小さな鞆を手に取る。買い物が終わったあとでマギーの家に持っていこうと、花瓶は玄関の靴箱の上に置いて家を出た。出がけに彼女の家を見る。この位置からは、彼女の姿は見えなかった。

どんなケーキを作ろうかと道すがらに考え、やはりここは、気取らずクリームティが良いかもしれないと思った。クロテッドクリームはある。スコンを作れば良い。

紅茶は彼女の家にあるだろう。そうだ、そうしよう。

ほとんどの材料は、既に揃っているようだったので、なにかおいしそうな果物でもないかと、青果コーナを眺めた。赤い、ラズベリ

イがとてもおいしそうだ。この間、買ったばかりのおいしいストロベリージャムを出そう、と考えてはいたが、そのラズベリーがあまりにもおいしそうだったので一盛り購入した。

ほかにも夕食用の材料をいくつか購入し、早々に店を出る。

二人でお茶を飲んだあとに、夕食も一緒にしよう。可哀相なマギィ。あんなにやつれてしまって、ちゃんと食事を摂っていないに違いないだろう。

私は家路を急いだ。

マーガリート幻想・後編

家の近くで、私は男性にぶつかると。よくは覚えていないが、たしか、あちらが飛び出してきたようだった。

私は小さな悲鳴を上げる。

「すみません。大丈夫ですか？」

申し訳なさそうに謝る彼を見上げた。黒い髪に眼鏡をかけており、何だか頼りなさそうな感じにも見える。大事に胸に抱えていた紙袋を見ると、一番上に載せていたラズベリイが少し潰れていた。

「はい……、大丈夫です」酷くガツカリした声で答える。

「ああ、これ、潰れてしまいましたね。すぐに新しいもの、買ってくださいましょうか？」

「いえ、ご心配には……」そこで私は、彼の胸元に広がるものを見付けた。「まあ……！」

「え？」

不思議そうに自分の胸元を見た彼は、そこに赤いラズベリイの染みを見付け、苦笑いをする。ぶつかってきた彼が自業自得とも言えるが、服に染みをつけてしまったという点では、私に非があるのだろう。

「大変……。早くしないと、取れなくなってしまうわ。私の家

が近くですの。今からいらして下さいませ」「びっくりしている彼の袖を引っ張った。

「いえ、これくらいの染み、洗ってもらえば取れますよ」

「時間が経つと、取れなくなってしまうすわ。さあ、こちらへ」

困っているらしい彼を連れて、私は歩き始める。そこへ脇道から帽子を目深に被った少年がひょいと現れ、男性の横に並んだ。

「なに？　どうかしたの？」

「ちょっと、染みが……」男性の答えだけでは意味が分からなかったようで、少年は首を傾げる。

「ほんのすぐ、近くですわ。ところで、お二人でお買い物ですか？」

「ああ……いえ、仕事の帰りです」男性が答える。少年は黙ってついて来ていた。

「仕事……、どのような？　あら、不躰な質問でしたかしら」

「構いません。医師、ですよ」

私は改めて彼の顔を見る。たしかに、こんな風貌の医者はいそうである。威圧的な雰囲気ではないので、気軽な相談はしやすそうなのかもしれない。

気が付くと、私の家までたどり着いていた。

「ここです。ああ、早く染みをどうにかしなくてはいけませんね」

「染み？」少年が不思議そうに男性を見る。そして、やっと胸元の染みに気付いたようだ。いきなり笑い始めた。「相変わらず、間抜けだなあ」

男性は眉をしかめ、少年の被っている帽子のツバをすこんと叩いた。帽子が落ちる、彼の顔がはつきりと見えた。彼は慌てて帽子を広い、再び目深に被る。

「まるで血がついているみたいだね」少年は微笑んだ。私は、その微笑が怖かった。

「上着を、脱いで下さいますか？」玄関を開けて、荷物を置くと私は言う。

「染み抜きなんてしなくて、大丈夫だよ。ほら」

少年が男性の胸元の染みを一撫ですると、そこにはもう、染みは見当たらない。幻でも見たのではないかと、何度も瞬いた。

「……あー、ここは貴女の庭ですか？ 綺麗ですね、あの花とか」その場を取り繕うかのように、男性が不自然に庭を褒める。

「ええ。私、マーガリートが大好きですの」

「マーガリート……、ああ、アルギランセナムね。僕も好きだよ」そう言っ、少年は花壇に近付く。

白いマーガリートが並ぶ花壇を、彼は少し悲しそうな表情で眺め

ながら歩いてきた。そして、ある地点で立ち止まる。

「あ……」私は思わず手を伸ばして、引っ込めた。

「どうか……されましたか？」

「いえ、その辺りは最近、植え付けたばかりです。堆肥が少し、臭いますでしょうか？」

「たしかにここ、嫌な臭いがするね」少年は、花壇の隅にある、蕾すらついていない一群を横目に見た。

少年は花を見るのを止め、男性に近付き、ぼそぼそと耳元で何かを囁く。きつと、早く帰りたいたでも言っているのではないだろうか。

私は、マギーとお茶を飲む約束をしていたことを思い出す。可哀相に彼女は、待ちくたびれてしまっているだろう。俄かにそわそわし始めてきた。

「あの、私、友人とお茶の時間を楽しむ約束をしていますの……」
続けて、染みのことを口にしようとしたが、染みが消えてしまったあの現象を口にするのは憚られた。

そうこうしていると後ろから声がかかった。

「あら、帰っていたのね。わたし、あなたまで帰ってこなくなってしまったのかと思ったわ。その方たち、お客様なの？」

隣からマギーが顔を出す。少年は好奇心旺盛な目を彼女に向けた。

「貴女まで、ということとは、他に誰かがいなくなったの？」

少年がした質問は、マギーを震え上がらせた。私は慌てて彼女を家に押しやる。

「マギーの夫が行方不明なのですわ。彼女は深く傷付いております。そっとしておいてやって下さいな。では、私も用意がありますので、失礼致しますわ」

そそくさと部屋の中に入ってしまつと、台所へ行って、持っていたものの準備をした。ジャムやクリーム、潰れてしまったラズベリイなどをバスケットに詰め、腕に提げると両手で花瓶を抱えて外に出る。

すると、まだあの二人組みがそこにいたので、私は驚いた。一緒にお茶を飲みたいのだろうか。

「すみません、もう帰るところです。最後に、どうしても貴女に言いたいことがあって……」男性は言いにくそうに、肩を竦める。少年はまた、ぼんやりとマーガリートを眺めていた。

「いいえ、何でしょう？」

「余計なお世話だと思われるかもしれませんが、早く自首、されたほうが良いですよ」

私は飛び上がるほど驚いた。

「何のことでしょうか？ あの、貴方は一体……？」

精一杯、隠したつもりだったが、体がガタガタ震えて思うように動かない。男性は、やや遠慮気に近付いてきて、名刺を差し出した。そこには『キユラソー事務所』と書かれており、住所と電話番号もあつた。彼は自分が医者だといっていたが、探偵のようなこともやっているのだろうか。

「それでは、失礼します」

それ以上、追及されることもなく、彼らは立ち去つた。去り際に少年が呟いた、マーガリートの花言葉が悲しく私に刺さる。

まさか、私がここにいない間に花壇を掘り返したのだろうか？

あのとき、もつと自然な振る舞いを心がけていれば、こんなことにならなかつたのだろうか？ ああ、もう、後戻りはできないのだ。

倒れるように座り込み、花瓶を抱き締めて泣いた。もう、耐えることができなかつた。花瓶の中のマーガリートが揺れる。

私は、私は、マーガリートが大好きだった。

マーガリート幻想・後編（後書き）

マーガリート幻想<了>

砂の城・前編（前書き）

全年齢……のはず、約10、500字。あらすじ：私は兄の代理で、ある男性と会った。兄と彼の関係を探るべく行動していたつもりが……？ キイワード：恋、失恋、思い出

砂の城・前編

私は、海を見ると彼のことを思い出す。

彼のことを思い出すと、幼いころ家族で海へ行つたことを思い出す。

両親と兄と私の四人、夏のよく晴れた日に海へ出かけ、私と兄は心行くまで浜辺で遊んだ。引いては満ちる波に触れずに、どこまで足跡をつけられるか競争したり、綺麗な貝殻を探したり、砂浜を走り回ったり。

本当に楽しかった。

中でも、兄と二人で作った砂の城は、濡れた砂を掘って入り口や窓をつけ、落ちていた木切れや貝殻を飾った。なかなか上手い具合に完成し、これを家まで持ち帰れないことが、ひたすら残念だった。

楽しかった、昔の思い出……。

*

最近、兄の様子がおかしい。

そのことに気付いたのはいつだったか。思い出してみると、たしかに、このところ小首を傾げずにはいられないような行動が数えるほどあった。だが、その理由を深くは考えもしなかったのだ。

兄と私は、郊外に住んでいる。両親はまだ健在であるが、私は学

校に通うために、親元から離れて暮らしている兄のところへ厄介になつていた。しかし、その学校も卒業してしまい、本来なら仕事に就いているはずなのだろうが、運悪くも必須のライセンスを一つ落としてしまい、少し自虐的に毎日を過ごしている。

趣味は散歩、クロスワード、読書。空想をするのも好きだ。十一月にある検定試験に向けて、目下勉強中。前回の試験も、あと少しのところだったので、今度こそは気を抜かずに頑張りたい。

兄は、近くの部品工場で働いており、朝と晩の食事は一緒にしていた。元より口数が多い兄ではなかったが、最近は何だか違う。疲れているというか、やつれてきたというか、どこか思い詰めたような表情をすることがあるのだ。

何度かそのことで尋ねてはみたものの、『何でもない』や『気のせいだ』などの返事しかないし、それでも私が諦めずに追及していると、この話題になるたびに彼は黙り込んでしまうようになった。

今朝だつてそうだ。朝食の最中にその話をしたところ、彼は答えることなく黙々と食事を平らげて、さっさと仕事に出かけてしまった。

ああ、私も自分のことで精一杯のはずなのに、兄のことなど心配していて良いのだろうか。試験まで、もう二ヶ月もない。今度、ライセンスを落とすものなら洒落にならないのだ。勉強に集中しなくてはならないのだから。

それでも、たった一人の兄のことだ。その後、私は何度かこの話題を振り、彼がそれに答えることはなかった。

ところがある日、仕事に行くまえの兄が、何だかそわそわしたような雰囲気です。部屋の中を歩いていました。

「どうしたの？」

尋ねられると、兄は驚いたように私を見る。

「お前……、今日は暇か？」

「暇ではないけど、特に外せない用事はないわ」

そう答えると、彼は少し考えている風に俯いた。

「……じゃあ、今日の午後三時に、公園へ行ってくれないか？」

「公園へ？ 何故？」この質問は、最もだと思つた。

「いや、詳しいことはいえないが、ベンチに座っていたら男が来るはずだから、そいつに約束はなかったことにしてくれ、と言つて欲しいんだ」

「その人は誰なの？」

「名前は……知らない。背が高く、眼鏡をかけていると思つた。力なく兄は言った。

もっと詳しく話を聞きだそうと思つたが、これ以上知らないのか、言いたくないのか、兄は話してくれそうにもなかった。仕方なく、私はこの願ひを受け入れることにする。公園に来る男性とやりに、

詳しい話を聞けば良いのだ。

これまで話すことを渋ってきた兄だから、聞き出そうとしても無駄だろう。それよりも、そう、その眼鏡をかけている男性からなら、聞き出せるかもしれない。

まさか、借金の取立てではないだろうか？ などと心配もしながら、午前中は机に向かって試験勉強をした。

午前中はそうでもなかったが、午後からは駄目だった。全く勉強が捗らないのだ。目先に気になるものがあると、どうも駄目だ。近所の公園までは、徒歩で十分程度だったため、一時間まえになると相手に質問する項目をメモに書き出してみたり、どんな返答があるのかを予測したりさえする。

待ち合わせの相手が男性であることは、注目すべき点だろう。兄は名前を知らないが、顔を知っているという。つまり、少なくとも一度は会ったことがあるということだ。しかも、そのときの用件が名前を名乗るようなものではない。

さらに注目すべきは、『約束はなかったことにして欲しい』という伝言だ。約束とは一体何なのだろう。私に代理を立てるくらいなのだから、兄が直接断らなくても良いような種類のもので、しかも、彼はわざわざ相手に会いたくないのではないか？

特に格好良いような兄ではないから、考えもしなかったが、実は兄に恋人がいて、彼女と結婚の約束をしていたのに恋敵が現れた、などという可能性もあるかもしれない。

想像は、どんどんあらぬ方向へと進みつつあった。早く確かめた

い！ 気ばかりが焦る。

三時が近付いてくると、机を離れ、一応どんな相手なのか分からないので身なりを整え、手ぶらで公園まで出かけた。

公園にたどり着き、備え付けの時計を見ると、まだ三時になっていない。ベンチは二つあり、どちらに座ろうかと迷った。兄はどのベンチとは言わなかったので、どちらでも良いのかもしれない。

噴水の前には誰か先客がいる。彼が待ち合わせ相手かもしれないと、公園をブラブラする振りをして様子を窺った。彼はサングラスをかけていて、上着のポケットに両手をつ込み、ぼーっと噴水から溢れ出す水を眺めていた。

公園を一周すると、近くにあったほうのベンチに座った。天気は良い。そうだ、家を出るまえに洗濯物を取り込んでくれば良かった。

ふと、私の顔に影が差し、見上げると噴水の側に立っていた男性がいた。

「横、座っても良いですか？」

「ええ」断る理由もなかったので、そう答えた。

「もしかして、ここで待ち合わせしてますか？」

隣に座った彼は、当然といえるような質問をしてきた。私も相手に来るまで暇だったこともあり、彼の質問に答える。

「ええ、三時に待ち合わせなんです。貴方は？」

当然のこと、こちらから質問をする権利はあると思った。

「ああ、僕は仕事の一環……かな」

どんな仕事だろうか、と私は興味を持つ。仕事中にサングラスをかけているなんて、大丈夫なのだろうかと余計な心配もした。

「公園で、お仕事ですか？」

「いや、別にここで仕事をしているわけじゃないけど、営業活動中」

分かり切ったことを尋ねてしまったようだ、私は少し恥ずかしくなり、苦笑いをした。

それにしても、彼は黒い細身のパンツにジャケットを着ていて、おまけにサングラスまでかけている。そんな格好で、どんな営業活動がされるのであろうかと、ますます興味は深まるばかりだ。

時計の長針は、12を過ぎた。

それからしばらく雑談をして、また時計を見る。もしかすると、相手は兄がいないことを遠くからでも確認し、帰ってしまったのかもしれない。

「そろそろ、帰ろうかな。おなかも空いたし」彼が少し伸びをして言った。

「おなか空いたのですか？」少し笑って、ポケットに飴が入っているのを思い出す。「私、飴を持っていますけれど、食べますか？」

蜂蜜味の飴を一つ、差し出す。彼が帰ったら、私も帰ろうと思っ
た。

「ありがとう」

にっこりと微笑んだ彼は、私の手の上に手を伸ばしたが、飴を手
に取るわけでもなく、手を握るようにして何故かキスをされる。彼
の冷たい唇が触れ、そっと離れ、意識が途切れるように眩暈を感じ
た。

「ごちそうさま」多分、彼は笑ってそう言った。

「あの……!」

掌の飴がベンチの上に落ちる。彼は立ち上がった。

「これは代償ということ、お兄さんに宜しく。来週また来るので、
気が変わったらどうぞぞ」

ようやくそこで、彼が兄の待ち合わせ相手であったことに気付い
た。兄と待ち合わせするには、酷く不似合いな風貌だ。どんな接点
があるというのだろう。彼はもう立ち去ろうとしているのに、私は
まだ、なにも質問をしていなかった。

「貴方のお名前は？」それだけが言えた。

「……キュラソー」

彼は、『キュラソー』と答えたと思う。ファーストネームは教え

てくれなかった。仕事だからだろうか。それにしても、何故、私は彼の名前など聞いたのだろうか。少なくとも、辛うじて一つは情報が増えたわけだ。

彼の背中が見えなくなると、ベンチに落とした飴を拾い、ポケットに入れる。飴がずっしりと重い。確認するまでもないのに、時計を見た。

ゆっくりと立ち上がり、おぼつかない足取りで家へ帰ったのだ。

家へたどり着いても、勉強を再開する気が起きなかった。謎は解決するどころか、ますます深まったただけだ。彼の名前を言ってみたところで、兄からなにかを聞きだせるわけでもなかるう。

来週、また来る、との発言が正しいのであれば、来週もあの公園に彼がやって来るのだ。そのときに、今度こそ聞き出せはしないだろうか。兄からは聞き出せない。彼から、聞き出さなくては。今度は、相手の顔も分かっていることだし、今日のような失敗だけは避けられるだろう。

そうしよう。来週、またあの公園に行つて、彼から兄のことを聞き出すのだ。

私は、そう決意した。

だから、兄が帰宅して、今日の塩梅あんばいを尋ねたときも、待ち合わせ場所には誰も来なかったと答えた。すると兄は安心したような表情をした。嘘は良くないとは思いつつも、この嘘は、心配事を抱えている彼をこれ以上心配させないための嘘なのだ。

これは、自分自身に吐いた嘘でもあったかもしれない。

砂の城・中編

次の日は、家庭教師の仕事があったため、予習をして彼女に家に向かった。その家は裕福だったため、お給料がかなり良く、飲み込みの良い生徒ため、教えるのに苦労するという事もなかった。

私たちは勉強だけではなく、ときどきお喋りも楽しむ。彼女の父親がなかなか教育熱心であったため、一度注意されたことがある。私なんて、普段はお喋りではないのだが、話が弾むと止まらなくなる質^{たち}なのだ。足音が聞こえると、今度は首にされるかもしれないと冷や冷やした。

「はあ……」彼女は溜息を吐く。

「どうしたの？ 今日溜息ばかりね」

「だって、気になる人ができたの。どこの誰かも分からないんだけど……」

そう言うため息を吐く彼女は、やっぱり女の子なのだと思う。自分だって、数年まえはこんな風だった気がする。

「ふうん、じゃあ彼の名前を知ることから始めなくちゃね」

「ううん、ファーストネームだけなら、知っているわ。不思議な感じの男の子で、少し話をしたけど、すぐに彼、いなくなっちゃった」

彼女は、その気になる相手の名前を覚えてくれた。それは、私に

海を連想させる名前だった。生憎、知り合いにそういった名前の人物は心当たりがない。

「でも、貴女のことだから、簡単に諦めないんでしょ？」

「ええ」彼女はにっこりと微笑む。「また、会えると思うから」

前向きな彼女の答えに好感を持つ。私だったら、彼女のように行動できなかったかもしれない。何をするにも臆病な自分だった。昨日の彼にだって、名前しか聞けなかつたくらいだ。次こそは、他のこともちゃんと聞かなくては、と心に誓う。

それから、今日やる予定だった課題が終わると、雑談を少し挟み、彼女が少し眠そうだったので、私は自宅へと引き上げた。

あつという間に約束の日が来る。試験勉強の休憩時間に、彼に聞きたいことをまとめておいた。今日こそはちゃんと、聞き出さなければ！

五分まえには公園のベンチに座っていた。前回と同じ場所だ。彼はまだ来ていない。今日は数人の子どもたちが砂場で遊んでいる。彼らは、砂の山を作っていた。私は昔のことを、少し、思い出す。

人の気配があつたので顔を上げると、そこにはキュラソーさんが立っていた。今日は眼鏡をかけていて、真面目そうに見える。きつと、伊達眼鏡だろう。

「あれ……？ 今日も代理なの？」

「ええ、残念ながら」もしかして、またキスをされるのだろうか、

と戸惑いつつ答えた。

困ったような顔をしながらも、彼はベンチの隣に腰をかけ、足を組んだ。さて、彼もやって来たことであるし、早速、質問を開始しなければ。

「今日も、良い天気だよね」

「ええ」続けて質問をしようとする。

「僕さあ……、天気が良いと眠くなるんだよね。木陰なんかで、昼寝がしたくなるよ」彼は質問するタイミングを与えず、欠伸をしながら言った。

「ここでも、お昼寝をされるのですか？」

つい、違う質問をしてしまう。

「いやいや、ベンチも悪くないんだけど、居心地が悪いというか……」

「硬いですしね」

ベンチはプラスチック製で、寝転んでも寝心地が悪そうだった。それに、彼の身長だとこのベンチでは十分に全身が収まらないだろう。

「硬いは硬いんだけど、ここで寝ていると子どもに悪戯されるから、落ち着いて昼寝もできないんだな」これが「彼は二カつと笑う。

どうやら、既に何度かベンチで昼寝をしたことがある模様である。好奇心の多い子どもたちのことだ、誰かがベンチで昼寝でもしているものなら、確実に悪戯をしそうであった。私なら、眼鏡や靴を奪うか、髪の毛を引っ張るだろう。

「膝枕があれば、考えなくもないけど……」

「え？」

私に膝枕をして欲しい、と言っているのかと思ったら、「冗談であったようだった。」

……駄目だ。つい、会話を膨らませたり、その場の質問をしたりしてしまふ。考えてきた質問なんて、まだ一つも尋ねられていない。しっかりしなくては。それとも、彼のペースに嵌ってしまったのだろうか？

「……兄は、最近悩んでいるようですが、何故か理由は知りませんか？」ようやく一つ目の質問を口にすることができた。

「ああ、君のお兄さん、なにか悩んでいるみたいだね。でも、その理由は知らないな」

ちょっと期待外れの答えだ。

「では、どうして兄が悩んでいることが分かったのでしょうか？」

「そりゃあ……、見れば判るよ。職業柄ね」

職業柄？ 一体、彼の職業は何だというのか。

「どんな職業をされているのですか？」

「秘密。君にはね」

それを聞けば、また少しなにかが分かりそうだったが、彼は職業を教えてはくれない。私には秘密、とはどういうことだろう。つまり、兄なら知っているのではないだろうか。しかし、兄に直接聞くわけにもいかない。自分で調べなくては。

「キュラソーさん、ファーストネームを教えてくださいませんか？」

帰ってから、調べてみるつもりだった。

「通常、ファーストネームは教えないことにしているんだ。僕だって、君の名前を知らない」

「では、私の名前も秘密です。どうせ、苗字はご存知なのでしょう？」

「まあね」

成り行きで、自分の名前まで秘密にってしまうことになった。特に私は、彼に名前を教えても不都合でもなかったのだが。何故彼はファーストネームを教えてくれないのだろう。キュラソーというのも、偽名なのかもしれない。

「そういえば、よく私が兄の代理だと分かりましたね」

「三時に待ち合わせ、だったんでしょ？ 彼に妹がいることは知っ

ていたし、よく見れば少し似ている。さて、僕は君を何と呼べば良いのかな？」

「さあ、何とでも。それか、当ててみて下さい。頭文字はLですか」

「じゃあ……、エルって呼ぼうかな」

名前を教えなかったばかりに、エルと呼ばれることになってしまいはしたが、それもまた悪くもなかった。それからまた、彼といくつかの話題を話した。予め作っておいた質問リストの中からも、いくつか消化することができたが、どうも彼と話をしているとおかしいのだ。彼は、兄のことをあまり知らないらしい。

彼の仕事と、兄と彼の間とでなされた約束というのが、重要な意味を持つことになりそうだった。ただ、肝心なその部分は、どうしても聞き出すことができなかった。

「君のお兄さん、もう来ないかな……？」

「さあ、また気が変わるかもしれません」

曖昧な返事をしてしまう。聞いた限りでは、兄はもう彼と会うつもりはないのだ。それなのに、期待を持たせるようなことを言ってしまった。

「じゃあ、来月の十三日の今度は九時に、ここで」

「ええ」

「……また、君が来るの？」苦笑しながら彼が言う。

私は驚いた。私は、兄のためだと思いながら、彼に会いたいのかもしれない。ああ、どうしよう、どうすれば良いのだろう。

それからあのことは、正直あまり覚えていない。気が付くと、家で夕食の準備をしていた。タマネギが目染みる。涙が出た。目が痛くて、とてもそのまま切り続けることができなかった。

兄に、彼のことを話してみようかとも考える。だが、彼から逃れようとしていた兄なのだ。話したとしても、それがかえって兄を悩ますことになるだろうことは、疑う余地すらなかった。私は悩んだ。それでいて、彼に憧れた。

これらのことは、頭の一部を悩ませはしたが、私から勉強を遠ざけるには至らなかった。休憩時間に彼のことを考える以外、今までどおりの日々が過ぎる。

砂の城・後編

十月に入ったある日、私が家庭教師の家に出かけ、いつも通りの授業をした。私の生徒は少し風邪気味であるようで、何度か咳き込んでいた。

「風邪みたいね。今日の勉強はここまでにしておく？ 貴女のお父様も、具合が悪いのに勉強しろとまでは言わないでしょう」

彼女はまた咳き込み、カレンダーを見てため息を吐く。

「本当に、風邪を引いたみたい……。キュラソー先生に来てもらわなくっちゃ」

私はその名前を聞いて、彼女の熱っぽい額に当てていた掌を無意識に外した。あの人と、同じ名前ではないか。

「キュラソー先生って？」

「主治医よ。眼鏡をかけていて、優しそうな先生」

もしかして、彼かもしれない……。でも、キュラソーなどという苗字はありふれている。このまえ、叔母がお世話になったと言っていた人の名前もたしか、キュラソーだったはずだ。

偶然の一致だろう。

必死で自分を落ち着けると、教科書を閉じ、彼女にゆっくりと休養するように伝え、その部屋をあとにした。書斎にいた彼女に父親

に、具合が悪いようだと言げると、すぐさま女中が呼び出され、彼女は電話をかけに走った。

廊下に出た私は、彼女がフォンの受話器を置くのを何の気なしに見る。そしてまた彼女は、主人の元へと歩いていった。誰もいなくなったフォンの、横にあった電話帳に書かれてあった電話番号を見たのは、なにかの囁きだったのかもしれない。こともあるうか、その番号を覚えると、自宅へ帰った。

覚えることはできた番号ではあったが、実際にかけることはできないでいた。もし、私の会ったキュラソーさんと、キュラソー医師が同一人物だとしても、彼が出るとは限らないのだ。

しかし、私は何かの誘惑に負けて、彼と約束をした日の朝、とうとう電話をかけてしまった。しばらくして、誰かが出た。どうやら子どもの声のようだ。

どうしよう……。私は何と言えば良いのだろう。

そのまま押し黙っていると、いたずら電話かと尋ねられた。そうかもしれない。堪^{たま}らなくなつて、受話器を置いた。

このことは、私を憂鬱にし、やはり電話なんてかけるのではなかった、と後悔の嵐が押し寄せる。彼と会う約束をしていなかったら、今日一日はそんな気持ちでいっぱいだったかもしれない。

公園に行くと、もう彼は来ていて、ベンチに座っている。私に気付くと、微笑んだ。

「こんにちは」

時間も忘れて、彼とのお喋りを楽しむ。気が付けば、話の内容は兄のこととは全く関係なかった。相変わらず彼は、私が本当に聞きたかったことの確信的な部分には触れなかったが、それでも会話は楽しかった。

ふと、彼が話を止めて顔を上げる。その視線の先には、公園の入り口で立ち止まった少年がいた。誰だろう、と私も彼を見る。

「ようっ！」

少年に向かって、キュラソーさんが手を挙げた。ただ挨拶をされただけなのに、少年は飛び跳ねるほど驚いて、返事もせずに逃げ去ってしまう。

「お知り合い？」

「一応ね」そう言って、彼は肩を竦める。

あの少年は、この男性と知り合いなのだ。彼なら、私が聞き出せなかったこの人の名前を知っているのかもしれない。本を手にしたから、図書館にでも行くのだろうか。特徴のある顔立ちだったので、もう一度見たら必ず分かると思った。

私はすっかり時間を忘れていたし、彼もなにも言わなかったし、時計を見ることもなかったし、気が付くと日が傾いていた。気付いてみれば、空腹かもしれない。幸い、おなかの虫から催促されるような失態は避けられた。彼も、一切の空腹を訴えなかったので、本当に少食なのか、忘れるほど熱中していたか、私が気付かなかったかのどれかだろう。

お喋りをしている時間は、本当に楽しくて、何故このままずっと喋っていられないのだろうとさえ思う。私は彼に、恋をしているのだろうか？

「キュラソーさん、兄ではないと駄目ですか？ 私では、代わりになりませんか？」そろそろ帰ったほうが良い、と彼に促され、私は思わず尋ねる。

「君は死にたいと思ったことがある？」予想外の質問をされ、驚いて彼の顔を見た。「もう、帰ったほうが良い」

私になにも答えなかったので、また帰ることを促される。

「次は……？」

「次はない、と言いたいところだけど、明日の朝、君のお兄さんが来なければ、今回のことは本当に諦めることにするよ」

彼ともう、会えなくなるかもしれない、という事実が無性にショックだった。それでも足は、家へと戻っていく。もう帰っていた兄が、不審そうに私を見た。勉強も手につかない。

兄に言ってみようか、明日、公園へ行くようにと。でも、彼らがどんな約束をしていたのか、私は知らない。私では役に立たないというのだ。

兄に直接聞いてみようか、でも、それはできなかった。

翌朝、朝食が終わると、のろのろと公園に向かう。誰もいない公園で、ベンチにポーっと座った。彼がそのうち現れて、隣に座った。今日も、兄ではなくて私だったので、なにか言われると思っていたが、特に他愛もない会話から始まる。

次第に、今日が最後だと言われたことも、嘘であったかのようにすら思えてきた。私は笑った。笑いながらお喋りをして、ふと気付くと、目の前に兄が立っていたのだ。

「どうも様子がおかしいとおもったら、こいつと会っていたのか！」

「兄さん……」

兄は、彼を睨み付ける。私はどうして良いのか分からない。

「俺が駄目だと判ったら、こいつに乗り換えようとしたのか！」

「とんでもない、僕は話をしていただけですよ。それに彼女は、望んではいないだろうし……。貴方は、仮契約を破棄しに来たのですか？」

キュラソーは立ち上がり、憤慨しているらしい兄を宥めるかのようにつづらった。彼のそんな態度も気に入らないのか、兄はますます眉間に皺を寄せる。

「ああ、あんな契約、破棄するとも！ 最初からこうすれば良かったんだ。破棄だ、破棄！」

兄が怒鳴ると、二人の間でなにかの破裂音が鳴る。興奮した兄は、肩で息をしていた。キュラソーさんは、見えないなにかの欠片を掴もうとして掴めなかったように、掌を握ってまた開いた。

「契約は破棄された。さようなら、エル。もう会うこともないだろう」彼は微笑み、私の頬を風のように軽く撫でると踵を返す。

「ま、待ってキュラソーさん……！」

彼の名を呼ぶ。彼は振り向かない。兄が私の手を掴んだ。

「あいつに近付くな！ あいつは死神なんだぞ！？」

兄は彼のことを『死神』と言った。だが、その言葉の意味は説明してくれなかった。いつの間にか彼の姿はなくなり、私は兄の手を振り払う。

結局、私は彼のことをこれ以上知ることはなかった。兄とはしばらく、口さえ聞かなかったが、そのままずっと蟠わたかまりが続くこともなく、なにかをキツカケにして今までどおりの日々が戻ってきた。

酷く落ち込んだため、勉強が手につかなくなるかもしれないという心配は、杞憂でしかなく、私は無事に資格試験を合格した。家庭教師の仕事を辞めることになるため、最後の挨拶に向かう。

ライセンスが取れたことと、いままでお世話になった礼を述べ、彼女の父親の部屋を辞した。部屋を出たとき、手にフェリシアの小さな花束を持った少年が通りかかった。彼と目が合う。その顔には見覚えがあった。

「こんにちは、貴方は？」質問に対し、彼は困った顔をする。

忘れもしない、公園でキュラソーさんが声をかけていた少年だ。

特徴のある容姿なので間違えるはずもない。

「キュラソーさん、って知っている？」質問を替えた。

「うん……、知ってる」今度は彼も、答えてくれる。

キュラソーさんのことを聞いたかった。いま、どこにいるのか。いま、なにをしているのか。彼のフルネーム、もう一度会いたい。

でも、私は潔く諦めなくてはいけなかった。なにも知らないこの少年に、迷惑をかけるわけにもいかないだろう。これ以上、聞くまいと決意する。

私の生徒だった少女が現れ、彼の名前を呼んだ。その名前は、以前教えてもらった、海を髣髴させるような名前だった。ああ、彼女は彼女が恋をしていた少年だったのだ。

「どうしたの？ その花束」

「うーん、喜ぶかなと思って」海を連想させる名前にピッタリな色の花束を彼は彼女に差し出した。

「花束なんて貰うとは思わなかった！」

「同感」

私は彼女と少し話し、お別れを言って、その家をあとにした。我が家に帰り着くと、何故か涙が零れ落ちた。どこまでも中途半端で、私は本当になにも知らなかったことだろう。

私は、海を見ると彼のことを思い出す。

彼のことを思い出すと、幼いころ家族で海へ行つたことを思い出す。

両親と兄と私の四人、夏のよく晴れた日に海へ出掛け、兄と二人で砂のお城を作つた。気が付くと満ち潮で、見る間に砂は攫われた。

彼は気が付くと私の心を占めていて、彼に纏わりついていた甘い香りに似たものが花屋の前からするたび、私は足を止めさせられた。

でも、私は彼の中では兄の妹以外の何でもなかったのだろう。

少しずつ、波に洗われた貝殻や石のように角を丸め、記憶が磨れていくことを願う。

いつかは綺麗な思い出になるように。

ああ、所詮あの恋は、波が来てあつという間に攫われ、そして脆く崩れ去る砂の城。

砂の城・後編（後書き）

砂の城く了く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3389ba/>

Cシアリーズ

2012年1月11日06時51分発行